



## 「見送り三振」より「空振り三振」を

高校球児の憧れの大会である第108回全国高等学校野球選手権大会が8月5日から始まります。試合に勝って泣き、負けて泣き、高校球児の一生懸命な姿に毎年感動します。そして、そのハラハラ、ドキドキのある場面でいつも重なる次の言葉を思い出します。

### 「人生のバッターボックスに立ったら、見送り三振だけはするなよ」

これは、元プロ野球選手の小林繁さん(1952~2010)の言葉です。この言葉はその後のテレビのCMにもよく流れてきて、当時の若者たちを励ますフレーズにもなりました。

9回裏、ツーアウト満塁、一打逆転のチャンスに代打で登場。ベンチやスタンドの応援は祈るような思いでバッターボックスの選手を見つめている。そしてカウントは、スリーボール、ツーストライク。相手投手も必死の形相。バッターも必死でボールにくらいついていく。そして、渾身の思いで投げられたラストボール。バッターはボールと判断して見逃す。そして、審判のコールは……。 「ストライク、バッター アウト」 見送り三振 ゲームセット。 「アー」という大きなどよめきとともに崩れ落ちるバッター。

私は非情にも「振らんにゃー、何のためにバットをもってバッターボックスに立っているの？ 振ったら当たるかもしれん。でも、振らんにゃー、絶対にヒットにならん。」とテレビ画面に向かって叫びます。

バッターボックスに立った選手は、ヒットやホームランを打つこともあれば、凡打や三振をすることもあります。私は、同じ「三振」でも「見送り三振をする選手」よりも「空振り三振をする選手」が好きです。きわどいボールを見逃すのではなく、果敢にねらって行って、結果として「空振り三振」となる。投げられたボールを見送ってばかりではヒットを打てませんが、空振りは何回か続けるうちにバットにかすり、やがてヒットになると信じています。

空振り三振はみっともなくも映りますが、打てると見定めたボールを真剣に打ちにいった結果なのだから、見ていてもどこか清々しさが残ります。しかし、見送り三振は、いわば何もしなかったと同じです。相手投手がどんなに凄くてもバットさえ振ればヒットやホームランになる可能性がゼロではありません。ゴロやフライでも守備エラーがあるかもしれません。でも振らなければ確実にゼロです。バットを振ったからといってヒットやホームランを打てるとは限りませんが、ホームランを打った人は全員必ずバットを振った人なのです。

ところで、私たちの普段の生活でも同じような場面が数多くあります。中学生にも次のように呼びかけました。「みなさんは、自分の人生という『バッターボックス』に立っています。見送り三振をした後、「あーあ、あのボールを打てばよかったな」と愚痴を言うのではなく、思い切ってスイングした後、「なぜ、バットに当たらなかったのか」をよく考え、しっかりと準備をして次のバッターボックスに立つことを続ければ、必ずやヒットやホームランを打てるはずです。」

小・中・高校生や若者には、一人ひとりが「見送り三振」ではなく、「空振り三振」を一つずつ積み上げて、やがて大きなホームランを打ってくれることを心から期待したいと思います。